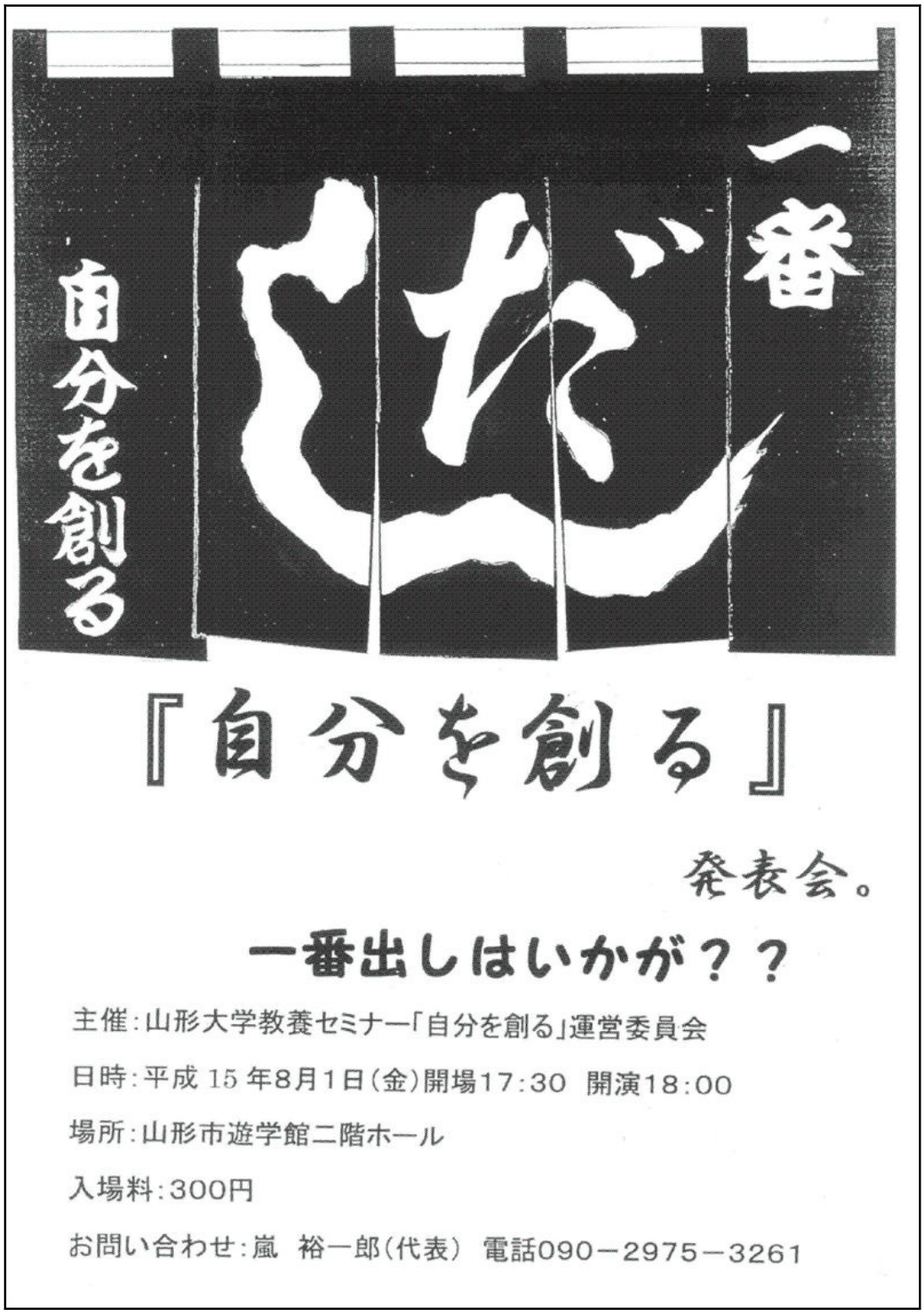
第 6章

新しい授業プログラムの試み



第6章　新しい授業プログラムの試み

１　e-learningの展望

はじめに

本年度のワークショップの基調講演「教養教育と情報化戦略」で，講演者の舘 昭氏からアメリカのバーチャル・ユニバーシティの現状について詳しい報告があった（詳細については本報告書の第1章を参照）。

その中で，舘氏は「情報化における成否というのは，大学の存亡を決める」「情報技術が，質の高度化をもたらす可能性を持っているということで，適応した大学が，できなかった大学を駆逐する」「（情報）技術戦略というのが，いまや大学が競争力のある優位性を獲得する上での経営戦略のかなめの要素である」と述べている。

ところで，日本においても，e-learningで卒業できる大学が本年4月から開校する。それが神奈川県横浜市の八洲学園大学である。この大学は，主に主婦層をターゲットとした，1学部（生涯学習学部）・2課程（家庭教育課程・人間開発教育課程）からなる通信制大学である。学生は，通常は，自宅で通信授業によってテキストを使って自学自習する。そして，インターネットを通じて添削指導が行われる。通信授業の他に，最低30単位を面接授業でとらなければならない。だが，この大学では面接授業の単位を，教室に出かけなくてもe-learningで代替できる。つまり，大学の教室にまったく通わなくても，大学を卒業できる。

八洲学園大学は，こうしたバーチャル・ユニバーシティを運営するために，インターネット上に「支援センター」，「カウンセリングルーム」，「図書館」，「サークル」，「購買部」など，既存の大学と同じようなシステムを立ち上げている。このように，e-learningという学習システムを立ち上げるだけでは，バーチャル・ユニバーシティを構築することはできない。そこには，既存の大学と同じような様々な手立てが必要なのである。

八洲学園大学の設立母体である学校法人八洲学園は，日本最大級の生徒規模の通信制高校を有し，それによって通信制の学校を運営するノウハウを蓄積してきた。さらに，学校法人八洲学園は，大学の設立準備のために，2002年12月に，e-learningに専業特化した株式会社デジタル・ナレッジと「高等教育機関向けe-learningサービス」を提供する新会社，株式会社デジタル・ナレッジ・ユニバーシティ・ラーニングを共同で設立した。

情報化戦略がこれからの大学の趨勢を決めるにしても，既存の大学が準備期間やノウハウの蓄積なしに闇雲にバーチャル・ユニバーシティに参入することは無謀と言える。

以上のような現状認識をした上で，山形大学が駆逐されないためには，どのように情報化戦略を立てればいいのかを，ITを媒介とした遠隔学習であるe-learningに絞って考えていく。「情報技術は，教育システムのみならず授業そのものの「質の高度化をもたらす可能性を持っている」からである。

e-learningの使い方は，(1)基礎教育の補習，(2)語学教育の自学自習，(3)入学前教育，(4)通常の授業のビデオ化，(5)国内の提携大学との単位互換，(6)市民への授業の開放，(7)資格に関わる授業の開講，(8)国外の姉妹校との単位互換，(9)インターネット大学とインターネット大学院が挙げられる。こうしたことを少し詳しく検討していこう。

(1)基礎教育の補習

自然科学，中でも数学，物理学，化学の基礎的な力が不足している学生が多い。そこで，e-learningを授業の予習・復習のための自学自習のWeb教材として活用することが考えられる。

Web教材を作成するときにもっとも重要なことは，最終的な到達目標と段階的な目標を明確にすることである。特に，段階的な目標を設定することによって，学習者は自分の到達段階を知ることができ，それぞれの段階に達したときに，達成感と自信を得ることができる。

Web教材を演習形式にする場合，ある一定の時間が経つと画面がブロックのように崩れるなどの工夫をして，問題を解く時間を設定したほうが，緊張感があっていいかもしれない。正解すると自動的に次の画面に移り，間違ったり解けない場合は解説画面に自動的に移るなどの工夫も必要であろう。このような工夫をしないと，静的な画面だけでは書物と同じだからだ。この他，他のWeb教材とリンクを張ることも大切なことであろう。

e-learningが他の通信教材と違った特性は，双方向性にある。それゆえ，Web教材を提供しただけでは，e-learningの特性を生かしたことにはならない。双方向性はe-mailを使うことによって確保される。e-mailで学習者の質問などに対応するのは教員である。だが，教員の日常的な多忙さを考えると，トレーニングを受けたティーチング・アシスタント（TA）の力を借りた方が良いのかもしれない。

e-learningでは，鵜飼のように鵜匠と鵜との関係性だけを言及しがちになるが，鵜どうしの関係を成立させることも大事である。つまり，学習者相互の関係性である。掲示板やチャットによって学習者が互いに教え合う「学習コミュニティ」を形成することである。この学習コミュニティが自然発生的に誕生することを漫然と期待するのではなく，あらかじめ授業の中でグループを編成してその種を撒いておく方がいいかもしれない。当然，各グループに優秀な学生を配置しておくことが必要である。

ここでは，基礎教育の補習としてのe-learningを，大学の授業クラスを前提として構想している。また，ここで提案したe-learningはあくまで既存の授業の補助的な手段に過ぎない。だが，教員がこの方法に習熟してくると，既存の授業の方法がe-learningを柱にして設計できるようになるかもしれない。そうなると，教室の授業はe-learningの補助的な場として利用されるようになるかもしれない。もし，この方法のほうが，学生の学力を向上させるのに向いているならば，何も従来型の授業に固執する必要はない。いずれにしても，個々の教師の工夫によって，e-learningと従来型授業を組み合わせた多様な授業

が生まれてくる可能性がある。こうした中で，互いに情報交換をしながら，組織的により良い授業のあり方を模索していかなければならないだろう。

教員誰もが一人でWeb教材を作成することは機材，技術，経費的に難しいかもしれない。もし，全員ができるとしても，同じような教材を全員てんでばらばらに作るのは非効率的である。そこで，微分積分学ならば微分積分学で，古典力学なら古典力学で共通した教材を作成した方が無駄がなくていいだろう。だが，もし共通化するならば，同じ分野の授業で到達目標を共通にしなければならない。このことは，テキストや試験を共通にすることにまで波及するかもしれない。だが，本当は，こうしたことはe-learningをするかしないかに関係のない問題である。

Web教材を公開するときに問題となってくるのは，著作権の問題である。我々はこうしたことにも組織的に配慮していかなければならない。

(2)語学教育の自学自習

語学教育の自学自習においても，(1)の基礎教育の補習と同質の問題を含んでいる。例えば，到達目標が個々の教員の自由裁量に任されていたり，それらが不明確であったりする場合には，e-learningを使って組織的な発展を構想することは困難である。やはり，e-learningを採用する前に，語学教育，なかんずく英語教育を組織的にどうするかが問われなければならない。

大学の英語の授業をTOEFLや英語検定試験の点数や級で免除するならば，大学の英語教育はこうしたことを一つの到達目標に挙げても構わないことになる。そして，そうした目標の下に教育プログラムを共有することもできるはずである。だが，こうした共通化を進めていくと，教材は大学独自のものを開発しなくとも市販のものですむようになる。だがそれでは，山形大学の英語教育の個性がなくなってしまう。こうした事態に陥らないためにも，山形大学の英語教育の教育方針が独自の魅力あるものに作り上げられなくてはならない。英語教育に対する期待やニーズは非常に高いのである。

山形大学の英語教育にe-learningを導入すると，この分散キャンパスの下でも，4年一貫の英語教育を展開できる可能性が生まれてくる。すべての学部学生のうち希望するものには，日常的なe-learningと集中の面接授業を組み合わせて，上級の英語教育を提供できる。それは1年で4単位，4年で16単位を認定できれば，英語コースを彼等の副専攻（マイナー）にできる。e-learningによって，学生にこうした付加価値をつけて，社会に送り出すことができる。こうしたことも，e-learningだけの問題ではなく，教育システムの問題に帰着するのである。

(3)入学前教育

推薦入学などで早々と入学の決定した高校生に対して，入学後の学修がスムーズに行くように手当てしなければならない時代にきている。そのための一つの方法としてe-learningが考えられる。e-learningによって，入学するまでに，大学生として必要な学力のレベルにまで高めてやらなければならない。ここにおいても，到達目標や段階的な目標を設定してWeb教材を作成しなければならない。さらに，e-mailによって進度をチェックし，ケアすることも必要である。

(4)通常の授業のビデオ化

現在，アメリカの大学で展開されているe-learningは，この方式である。我々が教室で行っている授業をビデオで撮り，それをインターネットで流しているのである。それは自由に見ることができるものもあれば，インターネット大学のように料金を払うものもある。授業自体をビデオで撮影し，それを流すこと自体は技術的にそう難しいことではない。大事なことは，そこに大学としての戦略や意味を持たせることである。そうしないと，公開することによってマイナス面が生じることも考えられるからである。

全ての授業をビデオ化してインターネットで流す計画のある大学がある。そうすることによって，教員のFD効果も狙っている。確かに，不特定多数に授業を公開することによって，教員は恥をかきたくないために襟を正すであろう。だが，実際には自力で授業を改善できない教員も多く存在することは，山形大学のこれまでのFD活動によって明らかになっている。授業の不特定多数への公開は，そうした教員のプライドを傷つけるばかりでなく，大学のイメージをも低下させることにつながる。まず「公開ありき」ではないだろう。そして，一つの手段に複数の目的を載せて欲張ると，「一兎も得ない」のである。

では，授業をビデオ化することによって，どのような利点があるのだろうか。まず，e-learningの材料を簡単に作成できることが挙げられる。わざわざe-learningのために教材を準備する手間はない。次に，そのビデオを自宅のパソコン画面上で見て，受講生が授業の復習をできるようになる。

このビデオ化の方式は，正規の授業の受講生のみならず，単位を履修する遠隔地の市民や他校の学生にも送信することができる。インターネットを使った授業としては，このビデオ方式が最も労力がかからない簡便な方法であろう。だが，前に指摘したように，インターネットで流す授業はそれなりに選抜しないと，受講生の不満も募ってくることが予想される。

e-learningを大々的に展開するかどうかは別として，取りあえずは，実験的に授業のビデオ配信を試みて，様々な問題をクリアしておくことも将来のためには大切なことであろう。

(5)国内の提携大学との単位互換

全国では，都道府県レベルや市のレベルで大学間の提携が進んでいる。この先行モデルとなったのが，「大学コンソーシアム京都」である。ここでは大学間の単位互換が柱となって，大きな成果を収めている。山形県においても，コンソーシアムが立ち上がろうとしている。だが，大学間の距離がかなり離れていることを考えると，京都のような単位互換制度は非常に難しい。

この距離を埋めてくれるのがe-learningである。e-learningを採用することによって，山形においても単位互換が可能になる。さらに，e-learningを使うと，距離は関係なくなるので，単位互換の対象となる大学を別に県内に限定する必要はなくなってくる。それを一挙に国外にまで広げていいのだが，ここでは日本語圏ということで，国内に限定することにしよう。

では，単位互換をするためにはまず何をしなければならないのか。それはe-learningを用いようが用いまいが，大学間で

単位互換協定を締結しなければならない。では，山形大学に対して他大学からどのようなニーズがあるのだろうか。正確なニーズ調査をしなければならない。おそらく，県内の単科大学や短期大学においては，教養教育のニーズがあるだろう。だが，山形大学の教養教育の授業すべてをビデオ化したり，Web教材化することはできない。それは浪費である。そのためにも，各授業のニーズを細かく調査しなければならない。

また，全国の大学に対して，山形大学の「売り」となる授業は何かあるだろうか。実際には，山形大学にしか存在しない授業など，ほとんどない。こうした事情は他の大学でも同じだ。ということは，e-learningで時空を越えて必要とされる授業は，そのクォリティに大きく依存していることが分かる。あらゆる大学でe-learningが展開されてくると，その市場での顧客獲得競争は激化してくることが予想される。つまり，各授業の質を高めておかなければ，単位互換協定を結んでくれる大学がいなくなる恐れがある。このようにe-learningのコンテンツやe-mailなどを使った双方向的なきめ細かいケアなどの，トータルな教育力が問われることになる。

(6)市民への授業の開放

大学間の組織的な提携だけでなく，個人的に山形大学の授業を受講したい他大学生や市民もいるだろう。ここでは，一般市民に限定して論じることにしよう。

従来から，誰でも科目等履修生になって大学の授業を受講し，単位をとることができるシステムはあった。だが，その料金はかなり高かった。別に単位を必要とせず，自分の興味や関心を満たし，高度な教養を身につけるために大学の授業を受講したい，と望む市民はかなり存在している。現在，その役割の多くを担っているのが放送大学である。

こうした現状において，全国の様々な大学で，授業料を比較的安価にして一般市民に開放するようになってきた。そのひとつが信州大学である。信州大学では多くの受講者を集め，中には毎週東京から受講のために松本まで通って来る社会人もいるという。

地域貢献は，別に産業に限ったことだけではない。高等教育機関として，教育サービスはもっとも大きな柱である。それに他県ですでに実施されていることから考えると，地域住民に高等教育のサービスをしないことは地域格差を拡大することにも繋がる。山形大学も地域貢献の一環として，市民に向けた教育サービスを展開していかなければならない。山形大学は，こうした教育サービスをすでに公開講座などで行っているが，15回の授業とは自ずと質と量によって違っている。

市民に開放する授業としては，教養教育の授業群が考えられる。先行する大学の事例から見ても，それが現実的な方策であろう。実際には，市民が正規の学生と一緒に授業を受講するために，e-learningを必ずしも必要とするわけではない。だが，面積の大きな県と交通事情を考えると，通学して授業を受けることができる県民はそれほど多くはない。また，専業学生ではないため，各自の都合のため受けられない回もあるだろう。こうしたことを考えると，授業をビデオ化して，e-learningとして準備することが学習のサービスとして必要になってくる。また，e-mail等で双方向性を確保することも大切なことであろう。

市民への授業の開放に伴って，すべての授業をビデオ化することは現実的ではない。それに対するコストはあまりに大きく，教員に多大な負担を強いるからである。最初は，e-learningを使わずに市民へ授業を開放するだけで良い。だが，その中でインターネットでの配信を望む履修者が多く，なおかつ教員もビデオ化することに積極的ならば，その人に協力してもらい，e-learningを試行することができるだろう。

(7)資格に関わる授業の開講

高等教育に対する市民のニーズは教養的なものだけではない。資格や免許に関わるニーズも大きいのである。では，山形大学は何を提供できるのだろうか。まずそこから調査しなければならない。そして，そうしたニーズの大きな授業を市民に向けて開講するのである。遠隔地や有職の市民に対しては，e-learningが有効な学習方法となろう。だが，山形大学としては，単位を発行する限りにおいては，対面授業を重視する姿勢を示し，教室での面接授業の時間をあらかじめ設定しておくことが大切なことであろう。

(8)国外の姉妹校との単位互換

e-learningの特性は，授業者と学習者の距離をまったく問題としない点にある。そこで，e-learningは国境を越えた学習システムに発展してきている。山形大学も一挙にインターネット大学として打って出る手も考えられるが，それは現実的ではない。大学として，国際化するような素地が乏しいのである。しかし，e-learningが国際化を加速するツールになる可能性を秘めていることは否定できない。

山形大学がe-learningを使って海外展開するためには，まず海外の大学と姉妹校の提携をする必要があるだろう。大学間の提携がない現状においては，学部が結んでいる提携を大学間に転換することが次善の策であるかもしれない。

提携した大学と単位互換協定を行い，e-learningを行う。当然，提供できる授業は限られている。しかし，できるだけ複数の授業によって系統だったコースを策定しなければ，個別の授業では魅力あるものにはならない。おそらく海外の大学生において魅力あるものとしては，日本語教育や日本文化論などが挙げられる。こうした授業には，夏季休業中などに山形大学で面接授業を実施すれば良いだろう。その際に問題となるのは宿泊施設である。そこで，山形市などと提携してホームステイのできる家庭を確保してもらうことも考えられる。これも，地域連携となる。もちろん，山形大生が海外の提携校で面接授業を受ける機会を得ることができれば喜ばしいことである。

提携校を利用した単位互換制度は，一定の学生の質を確保し，健全な国際交流を発展することのベースとなる。提携校との交流を重ねていくことによって，山形大学としても国際的な諸問題に対応できる技量が身についていくことだろう。

(9)インターネット大学とインターネット大学院

ここで言う「インターネット大学」と「インターネット大学院」は，e-learningを基本とした教育プログラムで学位を出す機関のことを指している。山形大学においては，今の対面授業による既存の教育システムを完全に放棄してインターネット大学になる

ことを言っているわけではない。そうしたことはあり得ないだろう。

可能な形態としては，山形大学内に「インターネット大学部門」を持つことである。平たく言えば，学位を授与する通信教育部門を創設することである。おそらく上記の(1)から(8)までのe-learningの経験を山形大学が丁寧に踏んでいけば，他の大学に先駆けて，通信教育部門を創設することも可能になってくるだろう。だが，それが山形大学の将来にとって良いことかどうかは分からない。

現在，通信教育でニーズが大きいのは学士課程よりも修士課程に移行しつつある。このことを考えると，特定の修士コースに限定してインターネット大学院部門を創設することの方がより現実味があるのかもしれない。いずれにしても，それは(8)までの経験を踏まないとリスクが大きすぎる。

これからの方策

e-learningは在学生の補習や自学自習のためにすぐに活用できるだろう。初めから完成した教材はできないので，試行錯誤していくしかない。 試行しながら学生の反応を聴いていくのである。もしかすると，Web教材を学生に作らせてみるのもいいかもしれない。その方が，学生が利用しやすい環境のものを作成するかもしれない。こうした能力や技術を学生たちはすでに持っているし，必要とあらば彼等は勉強し，その知識や技術を短時間に身に付けていく。

組織的に取り組むとするならば，最初に(1)の微分積分学や古典力学において，演習形式のWeb教材の作成に尽力した方がいいだろう。これは(3)の入学前の生徒の学習にもすぐに役立てることができるだろう。(2)の英語の授業の自学自習システムを構築することも緊急な課題であり，そのニーズも大きいだろう。

おそらく真剣に取り組めば，一年でそれなりのWeb教材ができるのではなかろうか。ここでそれなりというのは，学生に評価されて日常的に使われるものということである。市販のソフトよりも見てくれは悪くとも，山形大学の学生の実情にあったものでなくてはならないし，授業を受ける上でそのWeb教材で勉強したことが生かされてこなければならない。

こうしたWeb教材作りと平行してできることは，(4)の授業のビデオ化であり，それの配信である。これも試行錯誤しながら作っていくしかないだろう。この方式は(5)以降のe-learningの展開においても，ベースとなるものである。

2　学生主体型授業

はじめに

学生主体型授業の研究のために開始した『自分を創る―表現工房の試み―（教養セミナー）』の授業も本年で3回目となり，この授業のスタイルはそれなりに確立した。本授業の詳細な教育目的や授業の展開，成果については，前々年度と前年度の報告書を参照していただきたい。ここでは，最初に，本年度の授業の発表会を前にした授業者と受講者の声，そして発表会を見た観客の声を掲載する。こうした声から，この授業の雰囲気が読取れるであろう。本年度の授業でも，受講生によって様々な人間ドラマが展開され，発表会にまでたどり着けた。

次に，これまでの3年間の経験から2，3気づいた点を上げておく。学生主体型授業で得られた成果は，様々な形式の授業に利用できるものである。それは，伝統的な講義形式の授業においても然りである。

(1)本年度の『自分を創る―表現工房の試み―（教養セミナー）』の様子

履修者
- 人文学部：2人
- 教育学部：4人
- 理 学 部：3人
- 医 学 部：3人
- 工 学 部：5人
- 農 学 部：4人
- 合　　計 21人（内19人は1年生，2人は2年生）

班構成
- お笑い班　：3人
- アカペラ班　：5人
- ビデオ班　：3人
- 沖縄班　：5人
- ミュージカル班　：5人

発表会
- 場所：遊学館　大ホール（山形市）

日時：平成15年8月1日
開場：17：30
開演：18：00
終了：20：40

(2)発表会のプログラムに寄せられた言葉

○立松　潔（授業者）
―「自分を創る」に期待する―

「自分を創る」は山形大学の教養科目に分類されている授業ですが，他の授業とは性格がかなり違っています。多くの人は「え，そんな授業があるの」とびっくりするのではないでしょうか。実はこの授業は大学教育における「先進的な試み」の一つなのですね。他の授業とどこが違うかというと「学生主体型」ということです。学生が主体的・能動的に取り組んで意味のある作品を作り出すというのがこの授業の内容であり，目的です。教室に行って先生の講義を聴いて知識を得る，というのは「受動的な」学習ですね。それに対して「主体的・能動的」なのがこの授業＝『自分を創る』である，というわけです。

講義を聴いて勉強するというのは知識を増やすという点では結構効率の良い方法なので，馬鹿にしてはいけません。しかし，受身で知識を増やすだけだと，創造力とか，企画力とか，問題解決能力とか・・・要するに自分の頭で考え，発想し，何かを生み出していく能力はなかなか身に付かないわけです。そこで，大学の授業でも学生が主体的にものごとに取り組む場所を作り，社会で活躍するのに必要なそういう能力を身に付けてもらおう！・・・ということで，「学生主体型」授業が生まれたというわけです。

「学生主体」という言葉はなかなか魅力的な響きを持っていますが，実はこれがとても大変なことで，この授業をとった学生諸君はみなそのことを痛感しているんではないかと思います。与えられたことを覚えたり，マニュアルどおりに行動するのはある意味で簡単ですね。すでに確立されたことをそのまま受け止めればいいわけですから。ところが，自分たちで考えて作品を作り出すことになると，その意味づけも自分たちでしなければならないわけです。意味づけができないと自信がもてないから，なかなかうまくいきません。

考えてみれば，そういう「意味づけ」ということを通じて自分というものが創られていくんでしょうね。この授業名が「自分を創る」となっているのはそんな意味も込められているんだろうと思います。さて，今年の学生諸君はこの授業でどんな自分を創り出したのか？・・・8月1日の発表会が楽しみです。

○小田隆治（授業者）
―若さとは過剰なエネルギーである―

お忙しいところご来場有難うございます。皆様方がいて初めて発表会が成り立ちます。感謝の念にたえません。

いつの時代にも若者の間にくすぶる「好きなことをさせろ」という欲求に答えようと思って始めたのがこの授業『自分を創る―表現工房の試み―（教養セミナー）』です。今年で3年目をむかえます。教師である私が言うのもなんですが，3年前に授業を始めた当初は，この授業がいったいどうなっていくのか予想もつきませんでした。学生たちも「好きなこと」をかたちにしていくのに，もがき苦しんでいました。それが半年後にはこの遊学館で100人の観客を集めて発表会を行うことができました。昨年は受講生も増え，多様な催し物と伴に観客も150名に増えました。

今年4月のオリエンテーションでは，教室が満杯となる60名程度の履修希望者がいましたが，「この授業は大変だよ」という私の一言でほとんどの学生が去り，結果として本日の舞台に立つ学生だけが残りました。彼ら，彼女らによると，「あそこで去ったら男（女）がすたる」と思って踏みとどまったそうです。「でも，こんなに大変だと思いませんでした。もう一回あの場に戻れたら，あそこに残ったかどうか」。そうです。みんな大変な思いをしてきました。それは単に準備にかかった膨大な時間ばかりでなく，人間関係においても然りです。しかしそれだけ濃密な時間を過ごしてきたことも間違いありません。この強烈な経験が，これからの人生にきっと生きていくはずです。

若さとは過剰なエネルギーである。それが皆様に伝われば今日の発表会は成功です。さて，どうなるでしょうか。

○学生１（発表会代表者）
―夏本番!!―

本日はお忙しい中，私たちの発表会にお越しいただき誠にありがとうございます。

山形大学に入学して早いもので，もう3ヶ月経ちました。仲間たちとは３ヶ月，毎日のようにこの日のためだけに練習してきました。このセミナーを受講しなければ，どれほど楽に大学生活を送ることができただろうと思うこともありました。でも今は，このセミナーを受講して良かったと全員が思っています。何もない状態から始まったこのセミナーは，私たちの心の中に何物にも代えることのできないものを与えてくれたのです。

本日は自分たちの持っている全てを出し切る気持ちで精一杯頑張ります!!　そんな私たちのエネルギーを少しでも感じて，楽しんでいただければ幸いです。

○学生２（お笑い班）

私たちはお笑いが好きで集まった集団である。

しかし，“見る”のと“やる”のって，やっぱり違うんだよね。一言で「お笑い」と言っても，漫才・コント，ピン（一人）・コンビ・トリオ，ボケ・ツッコミ・・・たくさん種類があるのです。とりあえず，多方面のジャンルに挑戦してみました。が，なかなかうまくいきません。英語の授業を受けていても，数学の授業を受けていても，サークルに行っても，バイトしていても，おもしろいことは無いかと，常に探している自分がいました。いつからか，「ネタ作らなきゃ」と「私はもっとおもしろくなりたい」

が口癖になりました。

4月に初めて知り合って，もう8月か・・・。某授業に乗り込んで，ネタを発表したこともありました。へコんで，悩んで。それでも私は，お笑いが好きだ。

最後に，

笑うことは　幸せであること。
笑うことは　幸せになること。
私たちは，ただ“お笑い”が好きだった。
見る側から，やる側へ。
人を笑わせるっていうのは，本当に難しい・・・。

○学生３（アカペラ班）

我らがアカペラ班では何をするかといえば・・・さぁ何でしょう？？？っていうか，アカペラをするに決まってますよね（笑）。もともとミュージカル班の一員となるべくして集まっていたメンバーだったのですが，班決め直前になって裏切ったメンバーの集まりなんです。。。これマジです。そんな僕らだからこそ仲の良さは天下一品！まぁメンバーの脱退，リーダーの交代・・・などなど，本当にいろいろなことがありましたなぁ。。。でも，みんなでやれるだけのことをやって，無事に（？）今日の発表会にたどり着くことができました。自分を創るバンザイですねぇ!!

○学生４（ビデオ班）

僕たちは最初はどのような方法で自分を創り，そしてどのように自分を表現するか，そんな一番最初のことですでに悩んでいて，「自分を創る」の残飯でした。

しかし，三人の共通の趣味である映画鑑賞から，ビデオで映画を作るという目標を見出しました。そして今度はどんな映画を作るかというのに悩みました。そして，先輩たちがやったビデオ映画とは違うジャンルであるアクション映画を作ろうとしました。そして，クォリティ的にも内容的にも先輩たちを超えてやろうと誓い合ったのです。

三人で話し合い，今，僕たちが皆さんに伝えられることはないだろうか？　あるなら伝えてみようとして，平和を願う作品を作り出しました。自信はないけど見て欲しいです!

どうか皆さん，楽しんで見てください！

○学生５（沖縄班）

はてさてこんにちは！　このページで紹介いたしまするは，沖縄班通称ちゃんぷる～です。

ちゃんぷる～とはゴーヤーチャンプルーでも知られるようにごちゃ混ぜって意味なんです。日本各地から集まったメンバーからなるこのグループにはぴったりなネーミングでしょ☆　このグループは沖縄出身であるうちのリーダーが企てた，沖縄紹介をいたします。リーダーは別として，他の班員にとっては沖縄の文化に触れることは初めてでございました。まさに「エイサーって何!?」って感じです。全く無知なところから始まり，ビデオで踊りを解明する日々が続き，更に練習を重ね今に到ったわけです。なにしろリーダーがいまひとつ頼りなくて，なかなか進まず苦労しました。今日は私たちの頑張りをしっかりとかみ締めてお帰りくださいまし～～。

○学生６（ミュージカル班）

ほぼ毎夜，文翔館の前に集まる。そして，練習。しかし，ほとんどアドリブ・・・台本通りにやらないとダメだよ・・・。

気まぐれでミュージカルをやろうと提案した班長，山形大学を陰で支え花笠も踊る超多忙な男，普段はまじめに生活しながら空を飛ぶことを目指す男，今年から演劇を本格的に始めた変なテンションの男，漫才とミュージカルを掛け持ちする男，ハッキリ言って，この５人の男どもに何の共通点もない・・・この授業で出会わなければ，おそらく一生お互いのことを知らずに生活することになったであろう・・・。

観客アンケート

「私も何かやりたいと思いました。一生懸命で，かっこいいです☆」（18歳学生）
「授業だとは思えないくらいすごい」（18歳学生）
「私はみなさんのことを尊敬します」（19歳学生）
「すっごい，すっごい，す～っごいごい面白かったです!!　でも，でも，す～っごい頑張ったんだなーって思って，感動しました!!!　ビデオ化して欲しいくらいです」（18歳学生）
「とても充実感があった。一人一人の個性がはっきりしていて，みんないい味を出していて良かった。300円は安すぎる!　素晴らしかった」（18歳学生）

「みんな生き生きしててよかったです。全部面白かった。良い授業ですね」（19歳学生）
「0からのスタートってきっと大変だったと思います。お疲れ様でした。全て楽しかったです。ありがとう！」（19歳学生）
「とても良かった。みんなすごく熱かった!!　楽しかったデス。みんな良い声で，良い顔してましたよ。かっこいいと思いました」（20歳学生）
「出てた皆がなんかカッコよくてうらやましかったです。自分もこのセミナー取ればよかったなー!という気にさせられるくらい，良い発表でした!　楽しかったです!」（18歳学生）
「山大生のパワーを充分に感じた」（20歳学生）
「ミュージカルは笑いあり感動あり。脚本も自分たちで作っているのがすごいと思いました。おもしろかったです」（18歳学生）
「みんなはじけててこっちも楽しくなりました」（18歳学生）
「みんなの目が輝いていました」（20歳学生）
「元気がありとてもよかったです。かなりレベルが高かったですね。努力したのをよく感じました」（21歳学生）
「小田先生と立松先生へ　今日発表した学生への成績を「優」以外はつけてほしくないです」（21歳学生）

「正直，個性味あふれた創造物にびっくり！　すっごくよかったです」（21歳学生）
「本格的でよかったです」（18歳学生）
「久しぶりに熱いものを見させて頂きました」（21歳無職）
「お疲れ様でした。リハーサルから一緒の時間を共有させていただいて，とっても楽しい一日になりました。2～3回も見たのに，笑っちゃったし，聞き入っちゃたよー。どうもありがとう。またどこかで会えるといいねー」（22歳新聞記者）
「若いって素敵ですね」（25歳会社員）
「頑張りが伝わってきました。おもしろかった」（32歳大学職員）
「あっという間の2時間はすごく楽しめました。たかが2単位，されど2単位。これからの学生生活が充実するものと思っています。お疲れ様でした」（34歳公務員）
「若者たちの気持ちのこもった発表，とてもよかったと思います。グループ内だけでなく，他のグループの協力もあり，よかったです。この活動でたくさんのことを学び，これからの人生に生かされることでしょう」（46歳公務員）
「パワーをもらいました」（46歳公務員）
「若いパワーで元気をもらいました。みんな素晴らしいパフォーマンスだったと思います」（49歳大学職員）
「これで3回目です。毎年良くなってます」（52歳大学職員）

(3) ３年間の学生主体型授業で気づいたこと

受講者について

これまでの3年間の履修者数はそれぞれ25，40，21名であった。毎回，最初の授業のオリエンテーション時には，シラバスを読んだ学生が60名収容の教室に満杯になるほど集まった。だが，集まった学生一人ひとりに自己紹介とこの授業で何がやりたいのかを発表させる段になると，多くの学生が自己紹介の番が回ってくる前に教室を出て行く。この授業のオリエンテーションに集まった学生の多くは，別に何か自己表現をしたくて来ているわけではない。この授業には何か楽しいことがあるのではないか，楽しい人がいるのではないか，誰かが面白いことをやってくれるのではないかと，物見遊山に集まってきている。授業者としても，教室に満杯の履修希望者がいるので，受講者数を減らすために，「この授業は授業時間外の活動が多くてたいへんです」というような厳しいガイダンスを行っている。この授業者の言葉で大量の履修希望者が去っていく。だが，このガイダンスの厳しさの匙加減ができないので，こちらが思っている以上に学生が減ってしまう。

こうした厳しいオリエンテーションを経て残った受講生たちの多くが，具体的にしたいことを持っているわけではない。後で何人かの受講生が言うには「ここで席を立ったら，男（女）の名折れだ」と思ったそうである。この授業の選択の動機は，そんな単純な理由によるものなのである。このように明確な目的意識はないが，流されるのには少し抵抗のある学生がこの授業を選択した。この授業を履修した学生が，他の学生と比べて積極性があるかと言えば，決してそんなことはない。中には人一倍おとなしい学生も履修している。そうした学生も，途中で履修放棄することなく最後までやりとおしている。それがこの授業の隠れた誇れる点である。

グループ活動

この授業の特徴の一つは，作品制作をグループ単位で行うところにある。決して，単独の活動は認めていない。これは本授業が，人間集団の中でコミュニケーション能力を磨いていくことを教育目標の一つに謳っているからである。

グループの編成は第一回目の授業で行う。初年度はこのグループ編成も学生に仕切らせたが，どの学生もリーダーシップを発揮することなく，それかと言って民主的にも決まっていかなかった。ただの烏合の衆の集まりになった。そこで，このグループ編成は授業者が司会役となり，決めていった。どの授業でも同じだが，第一回目の授業はその後の授業の運命を決定する。もし，第一回目の授業が崩壊すると，以後の授業で立て直すことは難しいし，それをするためには多大なエネルギーを必要とする。

第一回目の授業によって，学生は授業のスタイルを判断してしまう。もし，それが弛緩した授業だったら，学生はそのような授業だと見切ってしまう。厳しい授業だと分かったならば，かれらは襟を正して受講する。もし，ずっと緊張感のない授業をしていて，途中で学生の受講態度に腹を立てて怒っても，それに対して学生はただびっくりするだけで，その注意に耳をかすことはないだろう。それは教師の脈絡もない突発的な怒りにしか受け取られず，教育的な効果はほとんどないのだ。

学生主体型授業のような自由なスタイルの授業でもっとも大切なことは，毎回の授業時間内にどこまで到達するか，という目標を明確にすることである。時間内にしなければならないことを，学生もよく理解していなければならない。でないと，話し合いをしても時間内に何も決められず，次回に持ち越すことになってしまう。それでも，充実した議論であれば学生もそれなりに満足するかもしれないが，そうでないと馬鹿馬鹿しくなって，以後の授業へのコミットメントが低下していくことになる。一度ばらばらになったクラスを再構築することは非常に難しい。

具体的には，第一回目の授業では，最初に，一人ひとりの学生にやりたいテーマとその内容について順番に話してもらうことになる。一人の持ち時間を，例えば1分と指定する。時間を指定することによって，話す内容が豊かになり精選される。時間を指定しないと，一言で終わったり，だらだらとまとまりのない話に終始することになる。

書記に指名しておいた学生が，学生が言ったテーマを黒板に書いていく。黒板に書くことによって，情報を明確にし，全員で共有化することになる。こうしないと，話したことが消えていってしまうのである。

テーマを出すことが一巡する。やりたいテーマを持っていない学生が多いことも発表内容や態度からわかる。そこで，次に，はっきりとやりたいことのある数人だけに一人当たり3分程度のプレゼンテーションをしてもらう。その後で，その学生を中心に集まり，内容を詰め，グループを編成してもらう。学生は席を立ち，実際にいくつかのグループを形成することになる。当然，ここでも話し合いの時間をあらかじめ設定し，話し合い終了後には各グループの代表者がメンバーの名前とテーマを説明しなければならないことを予告しておく。このように，常に作業内容と到達目標を明確に伝える。

時間がきたら，席に戻るように指示する。時間厳守で行う。

時間がルーズになると，学生もすぐにそれに慣れ，だらけてしまう。このように，本授業は時間や内容がかなり細かく指定されている。時間制限などせずに，自由に伸び伸びと話をさせたらいいではないか，という意見もあろう。確かにそのような授業があってもいい。否定するつもりはさらさらない。だが，自由で放任された無限の話し合いの時間は，授業時間以外にいくらでもある。実際，そうしたことをかれらは日々繰り返している。授業にしかできないこと，教師がいなければできないこと，それは有限な時間内で実りを持たせてあげることなのではなかろうか。我々は有限の時間の中で考え，行動し，生きている。そうした有限性の中で，最善を尽くして結論を出す。そうしたスタイルを体験してもらうのだ。

代表が順番にメンバーの名前と構想を述べる。次回の授業の予告として，各グループで構想の内容を詰め，レジュメを準備して構想発表会をし，それについての相互批評も行うことを告げる。さらに，レジュメの書き方も指導する。

この他に，この時間に決めることは，次回からの司会と書記である。それぞれ2名ずつとする。担当は毎回交代し，全員が一回は経験するようにする。具体的には，これからの授業の日程を黒板に書いて，各自の希望の日を挙手して言わせ，黒板に名前を入れていく。

2名の書記のうち1名は黒板に書く係である。もう1名は授業の進行や決まったことをノートに記録していく。そしてその記録を整理したものを，次週の授業の前々日までに，授業者に届ける。授業者は記録を受講者全員分コピーし，当日全員に配布する。こうすることによって，記録係はワープロを使えるようになり，受講者は正確な情報を共有できることになる。

こうした活動で大切なことは，授業者が出された記録の良い点や悪い点を指摘して，次回の記録係はそれを克服するように告げておくことである。そうすると，かれらは間違いなく向上していく。司会者に対しても同じことが言える。

学生主体型授業は，個々の学生の単独活動に中心をおいて構成することもできる。だが，本授業では，あくまでグループ活動を中心とし，学生相互の交流を重視した。このようにしても，決して個が集団のなかに埋没することはなかった。もし，グループの構成メンバーの数を5人以上にしたならば，その中でなにもしない者が出てくるかもしれないが，5人程度の構成員数ならば，一人ひとりの役割はできてくる。

本授業は，鵜匠と鵜の関係ではない。つまり，教師が個々の学生と繋がるだけで，学生相互の繋がりを持たない，というような構造にはなっていない。教師と学生，そして学生相互の関係を構築しているのである。本授業は，グループ活動が中心であるがゆえに，学生相互の交流が活発である。

発表会を行うということ

学生主体型授業とは言っても，この授業に果たす教員の役割は大きい。それは一般市民に対して有料の発表会をすることとも深く関わっている。教員は学生と伴に，発表会をそれなりの質に仕上げなければならない責務を負っている。もし，この市民に向けた有料の発表会がなければ，またたとえ発表会をしたとしても，それが学内でこじんまりと行うものであるならば，この授業における授業者のポジションも自ずと変わってきたであろう。

初めてこの授業を開講した時点では，授業者は市民への有料発表会を構想していなかった。一応シラバスには発表会をうたっていたが，それは学内の教室を借りて受講生以外の学生をよんだ発表会を考えていただけだった。それが，どうせやるなら市民に向けた有料発表会をした方が楽しいのではないかと授業者が考え，それを第一回目の受講者が受け入れたことによって現実のものとなったのである。発表会は，授業者の予想をはるかに越えた素晴らしいものだった。発表会をしたことによって，学生は大きな達成感を得，自信に満ち，光り輝いた。この成功により，二回目，三回目と発表会が定番になった。

このようにこの授業の特色は，市民に向けた有料の発表会にある。発表会は，学生のやる気を奮い立たせ，それを維持させることができる。

他の授業においても，音楽や美術などの芸術系の発表会だけでなく，理系や文系の卒業発表会，ゼミの成果などを市民に公開していければいいのではないだろうか。そうしたことが，市民との交流を深めるばかりでなく，学生の学習意欲を増すことにも繋がっていくであろう。

3　さいごに

学生主体型授業は，この研究を開始した3年前よりもかなり学内で受容されるようになってきた。それは，学内に様々なタイプの学生主体型授業が，ここ数年で誕生してきたことからも明らかである。また，FD合宿セミナーのポストアンケートを見ても，学生主体型授業に興味を示す教員が増えている。

本年度は，e-learningを実践していない。来年度は，なんらかの形でe-learningを実践し，研究してみたいと考えている。この研究と実践は委員会のメンバーだけでは難しいので，委員会以外の方が名乗りを上げてくれるのを待っている。声をかけていただきたい。

e-learningを研究する上で分かってきたことは，これまで蓄積してきた教育システムやコンテンツがどれほど重要か，ということである。伝統的な授業スタイルを保持しつつもそれを恒常的に改善していくことは，意外と技術革新に伴う新しい授業スタイルに簡単に順応できることなのかもしれない。いや，それは決して意外なことではなく，王道なのだろう。